

# ワークスタイル変革を促す 新世代オフィスの構築

～豊洲センタービルアネックスでの取組み～

## ワークスタイル変革がお客様満足度向上の近道

企業を取り巻く環境や顧客ニーズがますます多様化し、厳しさを増すなか、各企業には更なる知的生産性の向上が求められている。そうした状況のなか、IT業界では新3K（厳しい、キツイ、帰れない、等・・・）と言われ「恒常的長時間労働」などが大きな課題となっている。そのため、当社でも社員のワークライフバランスへの対応や個々人の能力を最大限に発揮できる環境作りにはワークスタイル変革が急務の課題と捉え、恒常的長時間労働の改善に取り組むとともに、裁量労働制のトライアルや自宅にて業務を行うテレワーク制度などの施策を始めた。

これは個々人の多様化する働き方への対応を図るとともに、個々人を大事にする企業文化醸成に向けての新たなトライアルであり、各社員がより生き生きとクリエイティブな仕事に集中し、お客様に変革をもたらすためにノウハウや知恵を生かし、ひいてはそれがお客様に良い成果をもたらすことを目指すものである。このような好循環サイクルを実現することが、当社が目指す変革である。

ワークスタイルを変革するうえで、オフィスの構築や移転に伴い検討する企業が増えている。本稿では、当社において豊洲センタービルアネックス移転に伴い取り組んだ「ワークスタイル変革を促す次世代オフィス」の構築事例を紹介する。

## 新たなプレイスで部門をまたがる コミュニケーションを促進

2006年8月30日に竣工、同10月に全入居を完了した



(株)NTTデータ  
ファシリティマネジメント部長  
遠藤 宏

豊洲センタービルアネックス（TAビル）は、

- ・新たなワークスタイル/プレイスの実現
- ・多様なワークスタイルを支える情報インフラの構築
- ・ビルセキュリティの強化

の3つのコンセプトで構築した新しいオフィスビルである。それらに対するビル共通的な取組みと各フロア入居部門の取組み事例を以下に紹介する。

## ビル共通的な取組み

ビル共通的な取組み施策として、各フロアへのコラボレーションエリアの設置、食堂フロアへの多目的スペースの設置、情報インフラとして全居室へのIP電話と無線LAN環境の整備、そしてエントランスから各部屋までの3段階のビルセキュリティ構築を行っている。

### ①コミュニケーションの活性化を促進する コラボレーションエリア

各フロアへ設けたコラボレーションエリアは、部外者



図1 コミュニケーションの活性化を促進するコラボレーションエリア

(社内・社外含む)とのコミュニケーションの活性化や、自席を離れたシンキングによる創造性発揮の醸成を目的として構築している。

オープンルームとすることを前提に、オフィスとは異なる空間の演出、目線を遮らないローパーテーションによるゾーニング、レイアウト変更自由(多人数での議論も可能)な空間構成を基本方針としている。清潔感のある白を基調としたエリアとなっており、簡単に移動可能な間仕切りは、ホワイトボードなどにも利用可能となっている。少人数のちょっとした打合せから、小規模なキックオフまで、また来訪者のお出迎えブースとして、また気分を変え一人じっくり考え込むスペースとして等、様々に利用されている(図1参照)。

各フロア入居部門のニーズに応じ、エリア内一部ブースの予約制やお客様が多い部門では、実質お客様対応の専用エリアとして活用する等、入居部門毎の特色も出てきている。またガラス張りの可動式間仕切りを新たに設置し、落ち着いた会議時にも利用可能とする検討等、運用改善も図られている。

## ②さまざまなビジネスシーンに対応可能な多目的スペース

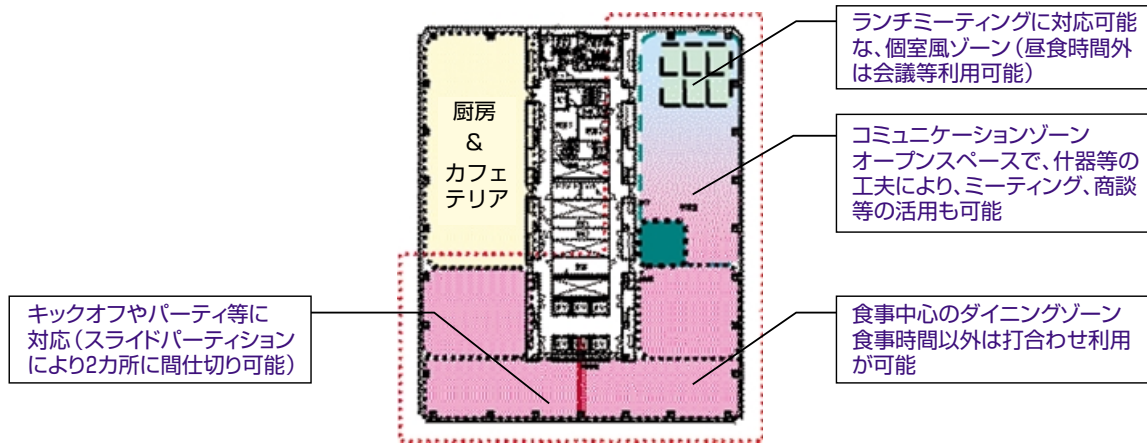
多目的スペースは、食堂スペースとの融合によりスペースの有効利用を兼ね、食事時間外でも会議・打合せなどのコミュニケーションスペースとして様々なビジネスシーンに利用できることを目的として構築している。

昼食時間に最も賑わうダイニングゾーンから、奥に進むにつれて少し落ち着いた雰囲気のコミュニケーションゾーンにデザインが変化していき、最も奥には間仕切りによって区切られた空間があり、ランチミーティング等にも利用されている。また、部門を超えた社内外のコミュニケーションや、1人または2～3人で訪れ、職場フロアから離れてのシンキングやリフレッシュに、先輩後輩での相談事に、気分転換がてらの社員等が資料を片手に携帯電話でやり取りして業務をこなす等、多様な目的に利用されている。本部単位の大規模なキックオフ等には最適な場となっており、年度始めの時期は特に利用の問い合わせが多かった。そのため、大規模使用に関しては予約システムを導入し効率的な管理を実施するなど、入居者の希望・利用実態に合わせて運用改善も行っている(図2参照)。

## ③ワークスタイル変革を支えるネットワークインフラ

情報インフラは、多様なワークスタイル実現の支援を目的として構築している。全社方針に従ったIP電話の全面導入と全フロアへの無線LAN環境整備を行い、セキュリティも確保している。

IP電話は、社員一人に入社時から退社時まで不変な個人電話番号をユニークに付与し、担当代表への着信と社員個人へのダイヤルインも可能としている。またFOMAデュアルフォンのブラウジング機能を利用してメールや



ダイニングゾーン



コミュニケーションゾーン



リラックスゾーン



ランチミーティングゾーン

図2 食堂フロアの多目的スペース(22、23F)

予定表の参照も可能としている。

無線LANは、NTTデータビル内であればIP電話とPCでのネット接続がどこでも利用可能であり、フリーアドレス型フロア等のデスクフリー環境に欠かせないインフラとなっている。例えば、従来型の固定型スタイルフロア内であっても、会議室へのPC持ち込みにより、会議中に発生した確認事項のネット調査やサーバ内資料確認、メールでの質問に対する回答受領等、迅速な会議の進行

等にも活用されている。無線LAN設備に対し、各フロア個別のレイアウト条件や変更等による感度不良に関する問合せ等を随時受け付けており、各フロアのワークスタイルにあわせて設備の調整を施している(写真1参照)。

#### ④お客様情報を守る強固なビルセキュリティ

ビルセキュリティは、各フロア入居部門の多様なワークスタイルの実現において、ビルとして担うべき強固な



IP電話機と無線IP電話による内線通話が可能  
FOMAデュアルフォン



各個人PCにインストールされたIPフォンソフト画面  
在席・不在席の状況により、コミュニケーション手段を選択することが可能。

写真1 ワークスタイル変革を支えるネットワークインフラ



1Fエントランスのフラッパーゲートと来客用自動扉  
警備員の立哨、カメラ監視により不正進入を防御

エレベータ内の  
ICゲート

各フロア居室入り口の  
ICゲート

写真2 お客様情報を守る強固なビルセキュリティ

物理的セキュリティを確保し、個人情報・機密情報等の流出を防ぐ目的で構築している。ICカードを利用した「エントランス」「フロア」「部屋」の3段階セキュリティとしている（写真2参照）。

「エントランス」にはフラッパーゲートを設置し、警備員の監視とあわせて共連れ防止を行っている。来訪者に対しては、訪問先の入居者がエントランスまで迎えてアテンドする方式としている。「フロア」セキュリティはエレベータの着床制御で実現しており、権限付与されている者のみがフロアに着床できる。現在、NTTデータグループ各社が入居しており、各社員は自社フロアへの着床権限を持つことを基本としている。実際の権限付与は各フロア部門の承認を元に行っており、協働者も含め各部門の業務に必要な者が否か、またその頻度及び必要期間に合わせた権限付与運用が行われている。

各フロアに設置されたコラボレーションエリアはそのフロア着床を許可された者に対してオープンなエリアであり、その存在は各居室へのセキュリティ確保にも役立っている。また食堂フロアに設けた多目的スペースにはエレベータ着床制限はなく全入居者が自由に利用できる。入居者は相手や打ち合わせ内容によって利用するスペースを選択しており、それは多様なワークスタイル実現におけるセキュリティ面からの物理的運用基盤となっている。

なお、入居後約半年経過時に、これらの取り組みに対する入居者アンケートを実施し

た結果、各取り組みとも良好な評価を得ており、また入居者からの様々な意見に対し、必要な改善策を適宜実施している。

### 各組織における働き方に応じた ワークスタイル変革への挑戦

R&D部門では、TAビル移転にあたり、研究開発成果をいかに見えやすく、また、研究開発を含め、当社ビジネスチャンスにいかに関与できるかを課題として、「次世代ワークスタイル&ワークプレイス検討ワーキンググループ（WG）」を部門内で発足させて取り組んだ。そのWGでの検討成果として、R&D部門における理想のワークスタイルとして「着想から成果発信までのアイデアの

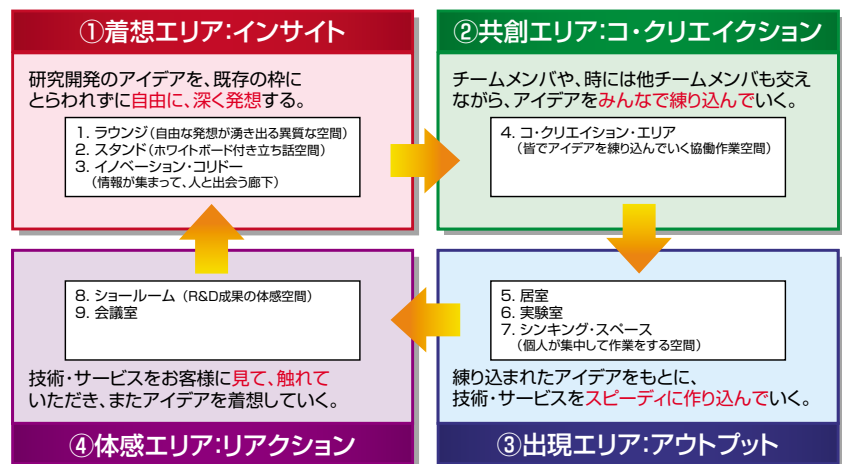


図3 R&D部門オフィスのワークプレイスコンセプト

## 特別企画

ライフサイクルを最大限に活かす」をコンセプト（図3参照）に、「全社内や社外（国内外）とのコラボレーションがダイナミックに行われ、R&Dのシーズが次々と創出されること」、「R&Dの活動や成果を社内外に対して可視化・体感できること」、そして「成果や収集した知識・情報を組織として共有でき、コラボレーションがセキュアにできること」を目指した。これを実現するワークプレイスは、アイデアのライフサイクルに応じたコラボレーションが図れ、R&D成果の体感・情報発信ができる空間であるとした。

具体的には、様々な人や情報が集まり意見を交換することができるプレイス、社内外とのコミュニケーション拠点となり、「集中」と「コラボレーション」「リラックス」など、様々な場面に対してそれぞれ最適な作業空間となるプレイスの構築として取り組んだ。その結果、アイデアのライフサイクル「着想・共創・出現・体感」を実感できるオフィスが構築できた（写真3参照）。

まず「着想」エリアは、研究開発のアイデアを既存の

枠にとらわれずに「自由に・深く発想する」ためのエリアである。アイデアがひらめきやすいように、なるべくリラックスできる環境でいろいろな考え方が頭に浮かぶ空間づくりを行った。例えば、イノベーション・コリドールは、オフィス通路にホワイトボードを貼り、アイデアを忘れないよう常時自由に書き込めるようにし、そのアイデアに対する他者からの意見等も追加書き込みを可能とし、事業ニーズにマッチした、より最新技術研修のアイデアを膨らますことを目的としている。また、最新技術トピックや、現在研究開発段階における検討課題、業務の棚卸し・進捗確認がチーム内で常時確認できるよう「仕事の見える化」を図ったり、最新技術動向等のお知らせ等、誰でも自由に書き込めるようになっている。その他、情報収集や斬新なアイデアが着想できるよう、雑誌架や湧き出たアイデアを書き留めるホワイトボードを配置し、リラックスした雰囲気を醸し出した空間も配備している。

次に「共創」エリアについては、皆でコミュニケーション



「着想」エリア  
イノベーション・コリドール



「着想」エリア  
ラウンジ



「共創」エリア  
コ・クリエイション



「出現」エリア  
シンキングスペース



「体感」エリア  
ショールーム



「体感」エリア  
ショールーム(展示会模様)

写真3 ワークプレイスコンセプトを具現化したR&D部門オフィス

ンをとりながらアイデアをく絞り込んでいく共同作業>の空間としてコ・クリエイション・エリアを作っている。そこはガラス張りでドアがない等、オープンな空間となっており、会議が行われていても自由に飛び入り参加できる工夫をしている。また、セキュリティ・環境に配慮し、当該組織で研究開発した、シンクライアント技術のミーティング用PCを設置する等しており、少人数でのブレインストーミングや意識合わせに活用されている。

続いて「出現」エリアは、絞り込まれたアイデアをもとに技術・サービスをくスピーディに作り込んでいくためのエリアである。一定の時間集中して調査や作業、資料作成ができる空間として、シンキングスペースなどを作っている。シンキングスペースは、窓際に配置し、少し高い間仕切りで囲む等、集中した作業ができるようにしている。

最後の「体感」エリアは、アイデアをモノやカタチにした技術やサービスを社内や社外のお客様にく見て・触れて>いただき、また着想していくためのエリアである。プロジェクトやデモンストレーション環境をあらかじめ用意しておき、プレゼンテーションスペース及びR&D成果を体感できるショールーム空間として活用している。移転早々から、営業部門と連携してお客様へのデモも多数実施する等、ビジネスチャンスに繋がる空間としても利用されている。最近でも、最新研究開発成果発表として、展示会に活用する等、体感エリアとしての活用幅も広がっている。お客様をはじめ、多くの人に自分で使って体感してもらい、研究開発の取組みに対して貴重なご意見を頂くことにより、さらなる新たなアイデア着想を生み出す等、重要なエリアとなっている。

以上のとおり、業務の特性上、アイデアをいかに生み出せるか、いかに活用できるかに重点をおいて、目指すべきオフィスをコンセプトから議論して構築した結果、アイデアのライフサイクル「着想・共創・出現・体感」の循環を図り、目に見えにくい研究開発の「見える化」を実現できるオフィスと言える。

組織内部で行った移転前のオフィス（従来のオフィス）との比較アンケートでも一定の評価を得ており、満足

度・生産性・創造性の向上に繋がっている。

### さらに多様化する ワークスタイル実現に向けて

当社のワークスタイル変革はTAビル以外でも各部門・組織にて実施されているが、全体としてまだ初期段階と言える。今後はある部門で実施した内容を他部門へも展開し、各々の業務実態に合わせたスタイルで組み入れていくこと、また実施後の改善活動（PDCA）を継続的にを行い、定着化を図ることが重要である。

今後、ワークスタイル変革を進めるにあたって想定されるテーマとしてユビキタスワーキングへの対応や仕事の「見える化」などが重要なポイントであろう。ユビキタスワーキングへの対応は、発足されるプロジェクトに合わせ、構成するメンバが時間や場所の制約にとらわれず、効率的に仕事をこなせるスタイルの確立である。そのためのナレッジやノウハウはセキュリティ管理された状態でいつでも活用できる必要があり、セキュリティ設備やITツールの技術進化と合わせた取組みは今後も必須である。仕事の「見える化」はワークスタイル変革に大きく影響すると言える。「見える化」のためには情報の整理・共有化が必須であり、それはそのままオフィスへのフリーアドレス型の導入をしやすくし、ひいてはテレワーク制や裁量労働制の導入等、多様なワークスタイル変革実現へのハードルを低くする。

下手をすると社員の消耗戦に陥りがちなITサービス業界にとって、ワークスタイル変革は企業価値の根底に関わるものであり、それは時代の変化に合わせて常に変革を続けなければならないものである。今後も冒頭に記した好循環サイクルの実現を目指し、多様なワークスタイル変革を促すオフィスの構築を続けていきたい。

お問い合わせ先

(株)NTTデータ  
ファシリティマネジメント部 ビルマネジメント担当

TEL : 050-5546-9489

E-mail : ikehata@nttdata.co.jp

URL : <http://www.nttdata.co.jp/>